

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820019

研究課題名(和文) 近代的演奏会の成立と変遷からみる作曲家の活動と市民の音楽享受の実態

研究課題名(英文) Activity of composers and acceptance of its musical works: Birth and development of the public concert

研究代表者

小石 かつら (Katsura, Koishi)

京都大学・白眉センター・助教

研究者番号：00636780

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：世界最古の市民オーケストラであるドイツのライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の創立(1781年)以来のプログラムの実物コピーを年月日順に整理し、完全データ化した。また1830年迄を精査し、当時、オーケストラ演奏会にもかかわらず独奏や独唱があったこと、オペラの簡略版ともいえるスタイルを持つこと、交響曲をメインに据えるスタイルが出現しはじめることを解明した。

市民と音楽受容の実態を考えるには複眼的な視点が必要であると考え、萌芽期のドイツに加えて現代日本における西洋クラシック音楽の受容実態についても調査した。日本におけるクラシック音楽CDの消費の変遷、音楽批評誌言説について口頭発表を行った。

研究成果の概要(英文)：The Gewandhausorchester in Leipzig is the oldest orchestra in the World, especially established and supported by the German bourgeois since the end of the 18. Century.

After filmed the whole programs of the Gewandhausorchester I organized them in date and shaped all data in to a database. Result of my close investigation on the contents of the programs chiefly in the period from its establishment up to 1830s I have traced that symphonies were played in concerts like nowadays while the concerts at the founding period of the orchestra had initially a style as a abridged version of the opera.

研究分野：音楽学

科研費の分科・細目：美学・芸術諸学

キーワード：音楽 19世紀 ライプツィヒ ロンドン メンデルスゾーン 演奏会 交響曲

1. 研究開始当初の背景

近代的演奏会——公共演奏会と言い換えてもよいそれは、市民社会の台頭と共に現れた。フランス革命を経た19世紀初頭、それまで教会や宮廷を主な舞台としていた音楽は、入場料収益を前提とし、演奏会専用のホールで開催される「近代的演奏会」を舞台とするようになったのだ。そこに介在したのは、まぎれもなく商業主義であった。本研究は、この「近代的演奏会」の成立の過程と変遷を検証することにより、「創造的である」といわれる作曲家の創作活動が、実際には音楽マーケットと不可分な関係にあることを実証しようとするものである。

2. 研究の目的

これまで、音楽学の研究は作品中心にすすめられてきた。本研究は、「演奏会」とそれを支える市民に注目することで両者の相互関係を実証し、音楽史に新たな見解を提案することを目的としている。

また、演奏会研究、作品研究、エディション研究、社会背景研究といった個別の取り組みではなく、それらを総合させて多角的に調査対象の事象を浮き彫りにすることを目的としている。

3. 研究の方法

(1) 世界最古の市民オーケストラであるライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の演奏会プログラムの変遷を、18世紀末から20世紀初頭(市民の台頭からブルジョワがマスカ化する時代まで)について調査する。

演奏会プログラム(演奏会の内容)の変遷
ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団
(1743年創立、1835年より1847年メンデルスゾ

ーンが音楽監督として活躍)の演奏会プログラムについてその変容を実証する。これは作曲家が提供するオーケストラ作品のジャンルの変化(芸術音楽と娯楽音楽)と、その背後にある家庭音楽(娯楽音楽)の普及/受容という二者間の因果関係をみる、目下の私の仮説=「作曲活動が聴衆との関係によって規定される実態」を検証する契機を与えることにもなる。つまり、下記の図のように、従来の音楽史において取り扱われてきたのは「芸術音楽」だけであったが、演奏会という「場」においては、芸術音楽も娯楽音楽もどちらも存在していたため、この「演奏会」に着目することで、どちらをも取り扱うことができるのだ。また演奏会は、作曲家と聴衆をつなぐ「場」であることから、聴衆である市民が家庭で音楽をたのしむという行為をも研究対象に含めることとなり、オーケストラ作品の受容の実態をあきらかにできる。そしてこれは、作曲家が受け手側に規定されていく有り様をあきらかにすることともなる。その一例として、オーケストラ作品における「演奏会用序曲」を考察対象とする。これは、従来の音楽史においては重要視されてこなかった分野であるが、当時の市民の家庭音楽としての受容を調査すれば、オーケストラ作品の頂点だとされる「交響曲」よりも人気のあるジャンルであり、現在は忘れられた多くの作品が作曲されていたことがわかる(この点については、以下の(2)も参照のこと)。



また、演奏会およびオーケストラの成立の最初期から現在に至る変化を、連続的なものとして、演奏された作品の量的および質的な観点からの分析を行うものは、国内外の当該研

究領域においてこれまでなく、初めての試みとなる。

プログラム資料のデータ化

ライブツィヒ歴史博物館に収蔵されているプログラム資料は未整理であるため、年月日順に並べなおし、さらにそれを電子データ化する。これにより、資料を容易かつ多角的に活用できるようにする。

(2) 演奏会と作曲家の創作活動

ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団とロンドン・フィルハーモニー協会の演奏会プログラムから、「序曲」の取り扱い方について時代的・歴史的に変遷を調査し、その機能を解明する。

演奏会プログラムにおいて、序曲が演奏される位置を、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団とロンドン・フィルハーモニー協会の演奏会とを比較し、あきらかにする。

演奏会で演奏されたオーケストラ作品は、ピアノ用楽譜として出版されていた事実に鑑み、その出版状況について、ホーフマイスター社の出版目録をもとに調査する。とりわけ「序曲」の出版が多かったこと、人気を得ていたことに関して、それが、後に花開く「交響詩」の先駆けとなったことを解明する。

上記に関連して、オーケストラ作品の編曲ではなく、オリジナルのピアノ作品として作曲されたもののうち、「出版されなかった＝手書き楽譜のまま残された」作品に着目し、なぜ出版にいたらなかったのかを作品の内的要因からさぐることで、出版の条件をあきらかにする。このために、メンデルスゾーンの未出版ピアノ作品の楽曲分析をすすめる。未出版ピアノ作品の自筆譜（筆者譜）は、ド

イツやアメリカ、イギリス等に保管されている。

(3) 現代日本における西洋クラシック音楽の受容実態

市民と音楽受容の実態を考えるには複眼的な視点が必要である。上記、萌芽期のドイツに加えて現代日本における西洋クラシック音楽の受容実態について、レコード/CDの販売や消費の変遷、音楽批評誌における言説を対象に調査する。またそれを、各国の同様の実態と比較する。

4. 研究成果

(1) ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の演奏会プログラムの変遷

ゲヴァントハウス管弦楽団のプログラム整理は完了し、1850年までについて電子データ化した（1850年以降については、活字化されて出版されている）。

主に1830年頃までの演奏会には、以下の特徴があることがわかった。すなわち、オーケストラ演奏会にもかかわらず声楽作品を演奏すること、オペラの簡略版ともいえるスタイルを持つこと、交響曲をメインに据えるスタイルが出現することである。この点については、日本音楽学会全国大会にて発表した（日本音楽学会の学会誌に投稿予定）。

(2) 演奏会と作曲家の創作活動

オーケストラ演奏会において序曲が演奏される位置は、ライブツィヒの場合、段階を経て変化していく。つまり、演奏会の冒頭、休憩前、後、演奏会の最後、という四つの可能性に分散していたものが、最後が消え、休憩前が消え、休憩後が消え、という順で淘汰されていく。ところがロンドン・フィルハー

モニー協会においては、四つの可能性全てに序曲が置かれる場合がある（一晚の演奏会に四曲の序曲が演奏される）など、圧倒的に序曲が多くとりあげられ、少ない場合でも一晚の演奏会に一曲は演奏されていた。そして、時代による変遷は見られなかった。

メンデルスゾーンの未出版ピアノ作品については、所蔵先不明と断片をのぞいた全作品に関して楽曲分析をおこなった。この内容は、ドイツのラーバー社より作品解説として出版予定で、以下の4つの章に分けて執筆している。1. 1825年までに作曲された作品(29曲)、2. 生前に作品番号無しで一度出版された作品(9曲)、3. 1840年代の未出版作品(9曲)、4. その他の作品(7曲)。この内、一つめの章は単独執筆で現在ドイツ語校正中であり、残りの三つの章はハンブルク大学のHubertus Dreyer氏との共同執筆で、私の担当は終了し、残部を委託済みである。

(3) 現代日本における西洋クラシック音楽の受容実態

日本における「交響曲」の受容について、第二次大戦後レコードの普及とともに日本に西洋クラシック音楽がひろく普及するにあたり、日本では他の楽曲ジャンルよりも、「交響曲」に重きがおかれて受容されてきた特殊性を調査で裏付け、ドイツ・カールスルーエにて行われた国際学会で口頭発表した。また、台湾で開催された国際音楽学会東アジア支部大会において、日本におけるクラシック音楽CDの消費の変遷（音楽CD全体の1割をクラシック音楽が占める、ウィーンフィル、ベルリンフィルの録音物が好まれた時代から、この2つだけでなく受け入れられるようになった実態等）について発表した。また九州大学におけるアートマネジメント学会の全国大会で、日本における音楽批評誌で、どのような言説がなされてきたのかに着

目した口頭発表を行った。主に扱ったのは音楽之友社発行の『レコード芸術』誌上で行われる「レコードアカデミー賞」の受賞作品の変遷、および受賞作品選考における言説の推移の考察である。この結果、西洋では見られない極端な偏りがあることがわかった。この内容に関しては、日本アートマネジメント学会の学会誌に論文を投稿準備中である。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 4件)

小石かつら、「音楽批評誌と音楽受容：日本と諸外国との比較」、日本アートマネジメント学会第15回全国大会、福岡県：九州大学、2013年12月8日。

Katsura KOISHI "Historical Overview of Classical Music CD Consumption in Japan in the Global Music Market", 2nd Biennial Conference (2013) East Asian Regional Association of the International Musicological Society, Taipei, Taiwan, 2013年10月19日。

Katsura KOISHI, "The Symphony and the Japanese", *MuSA2013: Fourth International Symposium on Music/Sonic Arts: Practics and Theories*, Karlsruhe, Germany, 2013年5月26日。

小石かつら、「ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団にみる演奏会プログラムの変遷」、日本音楽学会第63回全国大会、京都市立芸術大学、2012年11月24日。

〔図書〕(計 1件)

小石かつら 2012 「子ども理解の基本：社会の中での子ども」比嘉真人(編著)『子ども家庭福祉』(株)みらい、平成24年12月。pp. 67-75。

〔その他〕

寄稿 "How Music Comes into the World: The birth and development of public concerts.", *Kyoto University Research Activities 2013*, p.30, 2013年9月。

寄稿、神戸新聞 朝刊、音楽季評「演奏会をめぐる環境、鍵にぎるのは「時間」と「場」:

昼講演や劇場周辺の充実を」、2013年5月31日。

寄稿「研究の現場から：「演奏会」に注目して音楽史を問い直す」、京都大学『白眉センターだより』第5号、2013年3月。

神戸新聞 朝刊、音楽季評「主体的な鑑賞機会を提供：大阪交響楽団「ディスカバリー・クラシック」既成の価値観から自由に」、2012年11月30日。

神戸新聞 朝刊、音楽季評「オーケストラ公演の「会員制度」：お得に楽しむ良質な演奏、浸透へ一層のPRを」、2012年5月31日。

[アウトリーチ]

京都大学ジュニアキャンパス2013「ひらけ！好奇心の玉手箱」において、中学生向けゼミ「光の波・音の波」を工学研究科助教北村恭子氏と共同提供、京都大学桂キャンパス
2013年9月15日

平成25年度京都大学GL連携事業「ウルトラレッスン2013」にて、特別授業「モーツァルトは本当はどのような人物だったのか?」、京都大学白眉センター 2013年8月20日

対談「小石かつら×豊島文子 理系×文系ガチ」出張京都大学アカデミックデイ、科学・技術フェスタ、京都パルスプラザ 2013年3月17日。

6. 研究組織

(1)研究代表者 小石かつら

研究者番号：00636780